
クリスマスローズの罌

マイマイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスローズの罌

【Nコード】

N0107Z

【作者名】

マイマイ

【あらすじ】

僕はクリスマス前に友人の経営する花屋に訪れる。そしてその友人が僕にしたのは。。。そしてそのあともうひとりの友人が僕に。。。

自分が書いた「桜の下には」「ひまわりのむこうがわ」に出てくる3人をつかって書いてみました。本編とはなんの関係もありません
wwww

もちろんこれだけでもじゅうぶん楽しんでいただけます。

エロ度が自分の作品の中で一番高いです。。。

どうして、この時期になると毎年同じクリスマスソングが流れるの
だろう。

夜が暗いということさえ忘れさせるような電飾の数々。

輝くイルミネーションは、薄汚れた街を薄っぺらな光で覆い隠す。

このメロディを聴くたびに、僕の胸の奥は古傷をひっかきまわされ
たような痛みを感じる。

ちょうど3年前、僕はひとりの女性に出会い、

それから1年後のクリスマスイブに、僕は彼女を失った。よくある
話。

彼女への想いは、恋じゃなくて、愛なんていうのとも違う。

ただ、彼女を失った後、僕の身体が半分どこかへ行ってしまったよ
うな空虚が残った。

彼女のいない世界で、僕はなんのために生きているのだろう。

また考えても仕方がないことばかりがぐるぐると頭の中で渦を巻く。

どうやら目的地についたらしい。

僕は両手で顔をパンパンと叩いた後、小さな店の看板を見上げる。

『ウエムラ生花店』

「よっ、来たな」

サトシさんが何か大きな花束のようなものを作りながら、入り口の僕を見て笑う。

店の中は暖かく、こわばっていた頬やしびれるほど冷え切った手が体温を取り戻していく。

「こんばんは。サトシさん、今日は何の用ですか？」

サトシさんは僕の同居人の友人で、花屋を経営している。

背は高く、金髪に浅黒い肌。耳に光るいくつものピアス。猛獣のよ

うに鋭い目つき。

どうみても花屋と言うよりはチンピラに近い。

いつも泥だらけのツナギを着て、よく僕が暮らすハウスにも遊びに来る。

サトシさんは作りかけていたものを片付け、水道で手を洗いながら言った。

「いや、ケーキもらったんだよ、ケーキ！オレひとりで食ったんじやつまんねーからさ」

「ケーキ？」

「そうそう、オレの知り合いがケーキ屋やってな。クリスマスの試作品だとさ」

「はあ・・・」

サトシさんは店の奥から小さな折りたたみの机を引っ張り出し、その上に白い箱を置いた。

「まだ店閉めるには早いからな、立つたままで悪いけど食おうぜ」

サトシさんはニヤニヤしながら、ナイフとフォークを持ってきた。

「それならいつもみたいにハウスに持ってきてくれたら、みんなで食べれたのに」

どうしてわざわざ男ふたりでケーキを囲まなくちゃならないんだろう。

このひとのやることは、ときどき理解できない。

「・・・オマエとふたりきりで食べたかったんだ」

サトシさんの大きな手が僕の肩を抱き、鋭い目が、その瞬間せつなげに細められる。

でも僕はもうひっかからない。

「そういう冗談、疲れませんか？」

僕が言うと、すぐつまらなさそうにサトシさんはふてくされて座り込んだ。

「なんだよ、可愛くねえなあ・・・慌てるのを見るのが面白いのに」

僕だってハウスで毎度毎度、同居人のレイさんにいろいろおちよくられて、

サトシさんにも似たような冗談でさんざん遊ばれてきた。もうだまされない。

サトシさんは、まあいいや、と立ち上がる。そしてニツと笑う。

「なあ、ともかくその箱開けてみてくれよ。自信作らしいから」

その箱は15センチ四方くらいの大きさで、飾りも何もなく真っ白だ。

ゆっくりと箱を開ける。

「これが・・・ケーキ・・・？」

箱の中にあっただのは、花。

しろく小さな花卉。そのふちはほんのりと桃色をおびている。

真ん中が黄色く、全部で5枚の花弁を持つ花。

それがいくつも合わさってドームの形をつくる。

周りにはポインセチアの深紅の葉が散らされ、

それは一つの芸術作品といえるような、フラワーアレンジメントだった。

僕のびっくりした顔を見て、サトシさんは得意げに胸を張る。

「な！？すつげーだろ！！あんまり食い物に見えねえのが残念だけどなー」

フォークを手にとったかと思うと、サトシさんは惜しげもなく花卉の一部をもぎ取る。

とりあえず食べ、と、その崩れた花を呆然としている僕の口の中へ入れる。

クリームがふわりと僕の口の中で消え、爽やかな甘みが残った。

「・・・おいしいです・・・」

「だろ！？こいつのケーキは絶品なんだ。また今度紹介するからな
ー」

同じフォークで、サトシさんはバクバクとケーキを食べ始めた。

うまいうまいと言いながら、ときどき僕の口にも放り込む。

ガラス張りの店内の様子は、外を歩く人から丸見えだ。

いったい自分たちがどう見られているかを考えただけで、僕はうんざりした。

「このケーキな、クリスマスローズとポインセチアのイメージなんだってよ」

クリームをフォークですくい取って舐めながら言う。

「クリスマスローズ・・・」

名前だけは聞いたことがあるけど、こんな花だとは知らなかった。

可憐な花。でもどこか悲しげにも見える。

ちいさなケーキはあっというまに食べつくされ、サトシさんはフォークを置いた。

サトシさんがあんまり無造作にケーキを放り込むものだから、

僕の口の周りはクリームでべたべたになる。

それを指さして、サトシさんが意地悪そうに唇を歪めて笑う。

「クリーム、すげえいっぱいいついてる」

ついてるっていうか、つけられたんだ、と思いながら、指で口元を拭おうとしたら、

その手をサトシさんに強くつかまれた。

「え？」

サトシさんの日焼けした顔が近づいてくる。店内の光をうけて、いくつものピアスが輝く。

薄い唇からのぞく、赤い舌。凶暴なまなざしに、僕は怯んだ。

「じっとしてろ」

低く囁くその声に、僕はもう動くことができない。

僕の唇のまわりで溶けたクリームを、サトシさんはゆっくりと舐める。

しっとりと熱く、柔らかな感触。唇の周りから、頬、そして首筋へと。

「ちょ、ちょっと、サトシさん・・・」

「うるせえよ」

怒ったような声でサトシさんは僕の顎をつかみ、強引に唇を割ってその奥へと舌を忍ばせる。

「ちょ．．．やめ．．．んっ．．．」

舌を絡め、歯の裏側へ。どこまでも僕の口のなかを犯していく。

これは、なんだろう。どうしてこんな．．．いつもの冗談の続き？

身体の力が抜けて、僕は床に座り込む。

サトシさんは座り込んだ僕の頭を撫でる。

「オマエ、やっぱり、可愛いな．．．」

サトシさんはまた僕にキスをした。

今度は床に押さえつけられる。舞い散った色とりどりの花弁。

「いやだよ．．．サトシさん、僕は．．．」

頭が混乱して、どうしたらいいのかわからない。情けないことに、涙が出てくる。

サトシさんは僕の言葉なんて聞こえないみたいに、首筋から胸へと舌を這わせる。

シャツのボタンは外され、サトシさんの指が僕の乳首に触れる。

その刺激に僕は耐えられなくて声をあげた。

「やつ・・・ちょっと、ほんとに・・・やめろって!!」

サトシさんはまた、あの凶暴な目で僕を見る。

「敏感じゃねえか・・・その声、もっと聞かせろよ」

ほら、といって僕の乳首に歯をたてる。そしてまたそこを舌で何度も舐め続ける。

「いやだっ・・・て・・・いつてる・・・」

意地悪な指が、僕のベルトにかかる。あっ、と思う間もなく、僕は下着まで脱がされた。

「サ・・・サトシさん・・・？」

「我慢するな」

サトシさんは僕の唇に深く口づけたまま、指でペニスを弄りはじめた。

信じられないことに、僕のそこはサトシさんの手の中ですぐに大きくなって、

先から流れる透明の液体がぐちゅぐちゅと卑猥な音をたてはじめた。

身体の内側からものすごい快感の波が押し寄せてくる。

僕はたまらなくなって、サトシさんにしがみつく。唇を離して叫ぶ。

「あ・・・もうやめてくれって・・・いく・・・いっちゃう・・・から・・・」

ふいにサトシさんの身体が離れる。ペニスに残る、せつない疼き。

サトシさんが僕をうつぶせにして、尻を突き出させる。なに・・・？

「モト、可愛いなあ・・・」

後ろから、僕の尻の穴になにか冷たい液体が塗り込まれる。

サトシさんの熱い身体が背中から僕に重なり、後ろから手を伸ばして僕のペニスを刺激する。

直後、僕の中に熱い塊がねじ込まれた。

「あつ・・・いた・・・い・・・痛いよ・・・」

僕の声になんかかまうことなく、サトシさんはぐいぐいと中を突き上げる。

何度も腰を打ちつけてくるサトシさんの動きに、今度は僕の身体が反応しはじめる。

そんなはず、ないのに。こんなこと、いやなのに。

「サ・・・サトシさん・・・もう・・・僕・・・」

「いいよ、いけよ」

その声にまた刺激され、僕はサトシさんに突かれながら勢いよく果てた。

サトシさんはそのあとすぐに、僕の中に精液をぶちまけた。

僕はもう、何が起きたのかもよくわからず、そのあとはされるがままになっていた。

サトシさんは丁寧に、僕の汚れた身体を拭き、洋服をきちんと着せてくれた。

床に座り込んだままの僕をそのままにして、サトシさんは閉店の準備をすすめる。

花を全部店の中に入れて、看板をたたみ、シャッターを下ろす。

「モト、今日オマエ、泊まっていけよ」

サトシさんが優しく微笑んで言う。僕は答えられない。

自分でもどうしたいのか、わからない。

また唇に激しいキス。ああ、僕はもうおかしくなりそうだ。

そのとき、店のシャッターがパンパンと叩かれた。

サトシさんは舌うちして、誰だよ、と入り口に向かう。

僕はシャツの袖で、唾液に濡れた唇を拭う。

開かれたシャッターの先には。

すらりと長い脚、陶器のように白く滑らかな肌、

同じ人間とは思えないほど整った容姿を持つ、僕の同居人、レイさんがいた。

家庭教師の帰りなのだろうか。いつもの黒い光沢のあるスーツに身を包み、

上から赤いダウンジャケットを着ている。手にはふたつのヘルメット。

「モト、いるか」

「レイさん・・・」

僕は思わずレイさんに駆け寄った。

「ママンに聞いたら、サトシの店だろっていつから。ほら、帰るぞ」

無表情で僕にヘルメットを投げる。

僕はヘルメットを受け取った後、なんとなくサトシさんを見た。

サトシさんは腕組みをして、軽くため息をつき、

「お迎えがきちゃったかー。しょうがねえな」

と言い、僕の耳元で「お楽しみはまた今度だ」と囁いた。

その様子を見て、レイさんが不思議そうな表情をする。そりゃそうだろう。

僕はサトシさんに見送られながら、レイさんのZRX1200に乗せられて、

ハウスまで帰った。

顔を切り裂くような冷たい風の中、さっきのことが現実だったのかどうかからなくなる。

なんであんなことになっちゃったんだろう・・・

ハウスには珍しく誰もいなかった。

時間は午後10時。

本来なら、このハウスの持ち主であるママンと他に女性が3人いるはずなんだけど。

レイさんに尋ねると、

「ああ、ついさっきみんなで温泉に出かけた」

こんな時間に？

「夜から出発する、安いツアーがあるんだそうだ」

ふうん。

正直そんなことはどうでもいい。

僕はとにかく部屋に戻って、ひとりになりたかった。みんながいな
いならちょうどいい。

とにかく気持ちを落ちつきたい。

「じ、じゃあ、僕はこれで。レイさん、おやすみなさい」

僕は部屋への階段を駆け上がる。絶対不自然だ。わかっている。顔
が赤くなる。

レイさんはしなやかに後ろから追いかけてきて、

僕が部屋のカギをかけるまえに、僕の部屋に滑り込んだ。

「レイさん・・・」

「お前、なんかあっただろ」

あった、どころじゃない。でもそんなこと、言えるわけがない。

「あ、僕、さきにお風呂はいつてきていいですか？ちょっと疲れちゃって」

「・・・ああ、わかった」

レイさんは自分の部屋へ戻っていった。

僕は着替えとタオルをつかんで、1階の風呂場へ走った。

ママンたちが風呂を沸かしておいてくれたらしい。

風呂場にはもうもうと湯気が立ち込めている。

シャワーを浴び、身体を洗って湯船につかる。

さっきの出来事がどうしても頭から離れない。

ただの冗談？そのはずなのに、なんでこんなに苦しいんだろう。

サトシさんの低いかすれた声と優しい笑顔、あたたかな唇を思い出す。

風呂から出たら、もう一度、サトシさんのところへ行こうかな。

そして、どうしてあんなことをしたのか、ちゃんと教えてもらおう。

・・・でもそれが言い訳だって、自分でもわかっている。

僕はただ、もっとサトシさんのそばで・・・

そこまで考えたとき、風呂場のドアがノックされる。

「モト？まだ入ってんのか？」

そつえば、ふだんに比べてずいぶん長く湯船に浸かっていたような気がする。

「はい、すみません、もう出ます」

「いや、ゆつくりしてる。俺はシャワーだけでいいから。入るぞ」

ドアが開いて、レイさんが入ってくる。

真っ白な湯気のもこうで、レイさんの影だけがぼんやり見える。

僕はやっぱりなんだか照れくさくなって、風呂場を飛び出て、部屋へ戻った。

部屋へ戻って、カギをかける。

もう、今日は考えても無駄な気がする。もう早く寝て、夢だったと思っ、忘れよう。

僕は布団を敷き、部屋の電気を消して電気スタンドだけをつけて、大学の教科書を開いた。

・・・だめだ。ぜんぜん頭に入らない。

ドアがまた、ノックされる。

「モト。忘れものだ」

なんだろう。ドアを開ける。レイさんがふっと笑う。

「お前、俺になんか言い忘れてることあるんだろ」

いや。言い忘れとかじゃなくて、言えないんです。でもそうも言えない。

「入っていいか？」

どうせ眠れそうもない。僕はどうぞ、といってレイさんを招き入れた。

薄暗い部屋の中、レイさんはいつもの冷やかなまなざしで僕を見る。

「・・・サトシが、帰りになんか言ってたな」

「あれは・・・その・・・」

レイさんはいつだって、僕の心を見透かしてしまう。

僕は本当にだらしない。いつもみんなに振り回されてばかりだ。

あの春の件でも、夏のあの日も。

男のくせにだらしないとは思っけど、僕はまたボロボロと涙を零してしまった。

「サトシさんが・・・」

「何？」

僕はレイさんの綺麗な顔を見つめる。黒く長い睫毛にふちどられた、美しい瞳。

その瞳が一瞬、揺らぐ。

> 改ページ <

「言ってみろ」

「その・・・ケーキを・・・」

とても綺麗なケーキを2人で食べたこと。そのクリームが口の周り

についたこと。

それを・・・サトシさんが舌で舐めたこと。

僕の顔は恥ずかしさで真っ赤になっていたことだろう。

「・・・それで？」

レイさんの形の良い眉がひそめられる。綺麗な瞳が怒りの色をおびていく。

「それから・・・サトシさんが僕に・・・キス・・・を」

僕は続ける。それは冗談ですのようなものじゃなくて、深く長いキスだったこと。

そのあと、もっとほかのことも、されたこと。

僕は涙が止まらない。

レイさんは静かに立ち上がり、電気スタンドを消した。

部屋の中は真っ暗になる。わずかに差し込む月明かりだけがレイさ

んの影を照らし出す。

レイさんは僕の正面に座り、その指で僕の涙を拭いとる。

「何をされたって？」

冷たい声が僕の耳元に響く。

「キスを・・・されました・・・それから・・・舌を・・・」

レイさんは細い指で僕の唇に触れ、唇の周りをゆっくりとなぞる。

「舌を、どうされたって？」

「・・・レイさん？」

「答えろよ」

その言葉があまりに強い調子だったので、僕は肩を震わせる。

「舌を、口の中に、入れられて、それから・・・」

レイさんは僕の言葉を遮るように、その薄い唇を僕の唇に重ねた。

「んっ・・・」

僕は思わずレイさんを突き飛ばす。

「や、やめてくださいっ」

レイさんは逆に僕を布団の上に押さえつけた。細い腕のどこにこんな力があるんだろう。

「なんで、ひとりであいつの店、行ったんだ」

「だって、今日レイさん仕事だし、僕、ヒマだったから・・・」

レイさんは僕を押さえつけたまま、無理やり唇のなかへ舌を押し込んでくる。

「んっ・・・」

そのまま僕の性器に指を這わせる。

「なあ、サトシにどんなことされたって？もっと聞かせろよ」

レイさんの瞳に、被虐的な光が宿る。

そのキスはあまりに乱暴で、僕の唇に血がにじむ。

「レイさん・・・痛いよ・・・」

痛い、痛いと声をあげる僕を面白がるように、レイさんは僕の首に、鎖骨に、

胸に、つきつきと歯をたてる。肌に思い切り吸いつく。

僕は思わず叫ぶ。

「もうやめてください！サトシさんは、そんなことしなかった・・・」

「そんなにサトシがいいか？」

美しい瞳が、僕の間近でせつなげに歪む。

「いいとか・・・そうじゃないよ、レイさん、おかしいよ」

レイさんは僕を抱き起こして、今度はとても優しく、触れるようにキスをした。

さらさらと流れる茶色の髪。それがこんなに柔らかなものだ、僕は初めて知った。

「モト。お前はわかってない」

そっと僕を抱きしめて言う。

「一緒にハウスで暮らすようになってから、俺がどれだけ・・・」

腕に力が入る。僕はレイさんの腕の中でうめくように言う。

「レイさん・・・苦しいよ・・・痛いよ・・・」

「なのに、お前はサトシなんかと」

「違うよ、あれはサトシさんが・・・」

また僕は布団の上に乱暴に突き飛ばされた。

レイさんが、スウェットと下着を脱いだ。

すぐに僕の上にのしかかり、僕も着ているものを脱がされて全裸にされる。

レイさんのスリムな身体全体に筋肉が浮き出て見える。僕は自分の貧相な身体が悲しくなる。

「なあ、サトシはどうやってお前を犯した」

「レイ・・・さん・・・」

「……は？……うやって舐められたのか？」

レイさんは僕を押さえつけて乳首に舌を這わせる。何度も、執拗に。

「もう・・・うあっ・・・やめ・・・」

レイさんはまた、僕の身体に歯をたてる。胸から、腹、そして、ペニス。

「痛いよ・・・レイさん・・・んっ・・・」

こんな状況なのに、僕のペニスはこれ以上ないほど大きくなっていた。

レイさんの唇が、舌が、ぴちゃぴちゃと音をたてて責め立てる。

もうこれ以上続けられたら僕は・・・

「レイさん、お願いだよ、もう・・・もう許してよ・・・」

レイさんは身体を起こして、僕の髪を強くつかみ、冷たく言い放つ。

「許さない。サトシにやられるのが嫌だったらどうして逃げなかつ

た？」

「それは・・・」

「本当はやられたかったんじゃないのか。サトシのことが好きなんじゃないのか」

「違うよ、そんなじゃないよ・・・」

レイさんは僕の目に、その綺麗な顔を近づけて言う。

「モト。お前、俺が好きか？」

息が止まる。・・・わからない。でもその美しい顔も、長い足も、格好いいところも、

いつも僕を守ってくれる優しいところも、たしかに僕は大好きだ。

だからそのまま、レイさんに伝えた。

レイさんは僕の手を優しくとって、自分の顔に触れさせる。そして首、肩、胸、足へと、

順番に自分の身体に触れさせていく。

「なあ、モト。俺の顔も、身体も、まるごとお前のものだ。何があっても守ってやる」

僕はなぜだか涙がおさえきれなくて、またポロポロ泣いた。

「だから、もうひとりでサトシに会いに行くな。わかったか？」

僕は泣きながら何度もうなずいた。

「絶対だぞ。俺以外に今度抱かれたら、絶対に許さないからな」

レイさんの唇がそつと僕の涙をすくい取る。

「レイさん……」

僕はうれしくて泣いているのだと気づいた。

レイさんに、こんなにも大切にされて、僕はもう何も怖がらなくて
もいいんだと。

あのクリスマスソングも、いまなら聴いても大丈夫かもしれない。
そんなことを考えた。

僕は自分からレイさんの首に腕を絡ませて、布団の上に誘った。

レイさんはクスクスと笑いながら、僕の身体中にキスをして、

そっと僕のペニスに触れる。

「モト・・・いいか？」

レイさんが望んでいることはわかっている。僕はレイさんの唇にそっとキスをした。

そして、布団の上にうつぶせになる。

レイさんの熱く柔らかな舌が、僕の敏感な部分を押し広げていく。
細い指が絶え間なくペニスを刺激する。

「んっ・・・あ・・・ん・・・」

恥ずかしい声が漏れる。レイさんが耳元で囁く。

「どうしてほしい？なにがほしい？」

ああ、もうわかっているくせに、意地悪だ。僕はかすれる声で叫ぶ。

「お願い・・・レイさんのを・・・僕に・・・ちょうだい・・・」

指の動きは激しさを増す。

「うあっ・・・ダメ・・・僕もう・・・」

そのとき、僕の中にレイさんが入ってきた。熱く激しく、僕の中で暴れている。

「モト・・・もう、俺だけのものになれよ・・・」

一番奥まで入れた状態で、レイさんが動きを止めて僕を後ろから抱きしめる。

「んっ・・・レイさ・・・ん・・・わかったよ・・・うれしい・・・」

レイさんが僕の名前を呼びながら突きあげる。

僕はだらしないう声をあげながら、それを受け止める。

幸福感と快感の波にのまれて、僕たちは同時に果てた。

もう、離れない。僕はレイさんの、もの。

＊＊

ジリリリリン、というものすごい音で目が覚めた。

頭が痛い。目の前にサトシさんとレイさんがいる。耳元で巨大な目覚まし時計が鳴っている。

「うはははは、オマエ、なに昼間っから寝てんだよ!？」

ああ、そうだ。昨日バイト先の飲み会で遅くまで飲んで・・・

じゃあ、あれは、夢・・・？

サトシさんは勝手に僕の部屋のちいさな机をひっぱりだして、

その上に飲み物とケーキを並べはじめる。

ごく普通の、ショートケーキ。

「今日はクリスマススイブなのに、どーせ予定もないだろうから来てやっただよ」

サトシさんが笑う。

レイさんは呆れた顔で、お前がヒマなだけだろうが、とつぶやく。

当たり前、いつものふたり。

僕はなんとなく夢をみていたんだろう。思わず笑いがこみ上げる。

そのあと、安いシャンパンで乾杯し、ケーキを食べながらくだらない話をした。

「あ、そうだ。知り合いのケーキ屋が、明日ケーキが余ったらくれるって言ってた」

サトシさんが思い出したように言う。

「モト、甘いもん好きだったよな？明日ヒマなら店に来いよ。可愛がってやるからよっ」

妖しげなまなざしを送ってくる。背筋が寒くなる。

レイさんが僕の肩を抱いて、

「ふざけんな。こいつは俺のモノなんだよ。なあ、モト」

と唇が触れそうな距離まで顔を近づける。

一瞬の間。

ふたりがお腹を抱えてギャハギャハと笑いだした。

やられた。またからかわれた。

こんな毎日をごしていくのも、まあ悪くないか。

僕はふてくされた顔で、ふたりのケーキにのっていたイチゴをひよいひよいと食べてやった。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107z/>

クリスマスローズの罌

2011年11月30日19時47分発行